

Comparison of prevalence of atopic dermatitis in Japanese elementary schoolchildren between 2001/2002 and 2007/2008.

出典	J Dermatol. 2009 Sep; 36(9): 512-514. (http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/19712280)
著者	Saeki H 他
調査地域	北海道、東京都、大阪府、福岡
調査時期	2001~2002年、2007~2008年
調査対象	小学生(6~12歳)
依頼数	2001~2002年: 12292人 2007~2008年: 7367人
診断方法	UK ワーキンググループに基づく日本語質問表
有症率	2001~2002年: 12.7% 2007~2008年: 12.1%
学年別有症率	2007~2008年 小学校1-3年生: 12.6% 小学校4-6年生: 11.4%
男女別有症率	2007~2008年 男児: 12.0% 女児: 12.1%
調査概要	国外ではUK ワーキンググループに基づく質問票は有病率の研究に有用であると評価されている。我が国でも2004~2005年に行われた小学生を対象とした研究では、本質問票でのアトピー性皮膚炎の有病率の見積もりができる可能性が示唆された。今回4地域(北海道、東京、大阪、福岡)において、2001~2002年と2007~2008年の日本小学生のアトピー性皮膚炎の有病率の推移を質問票のみで評価したところ、それぞれ12.7%、12.1%であり有意な変化は認めなかった。